

あの夏ぼくは

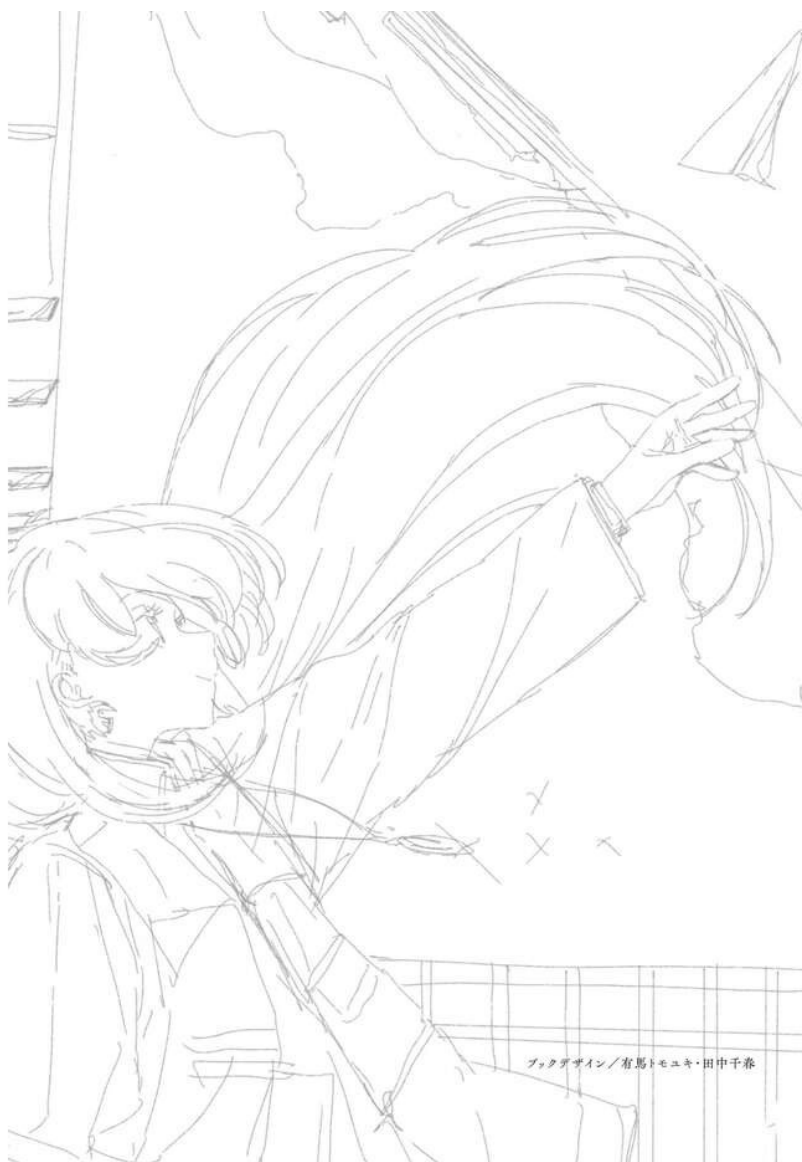
絵・焦茶／詩・岩倉文也

天使を見た





そしてぼくは光のこえをたぐりよせ
あわだつ橋をわたってしまふ



目次

【第一部】

そしてぼくは光のこえを……

モノローグ

はじまりの場所て

天使の瞳

挨拶

不安

位置

遅延

死亡通知

休息

光の束に目を細め

【幕間】

初夏よ 死は香りたつ……

唇の湿りのひとく……

やるせなくなる夢だから……

忘れられた言葉は空の……

夢もまたひとつの声に……

妄想のなんてやさしい朝だろう……

みずぎわに映く花枯れて……

人知れずながれるあめの……

との時間切れも愛しい星下がり……

八月の肌をながれる水の……

ふいに目覚めふいに眠って……

その日にはその日の地獄……

死の眠り きのは花を……

嘘まで溺れる きみの手の……

ほんとうはだあれも好きじゃ……

ゆめうつつうみへとつづく……

【第二部】

愛はそらの上からふいに……

うす青いがらすにゆびを……

点滴のどこまでもただ……

全部嘘でしかないことの……

ゆれる船ゆられる肌の……

日々の骨 ひろいあつめて……

影に影重ねてばくら……

冬の空 きみはことばに傷ついて……

そこだけが冷たい自室……

死ぬのはいつもぼくの内部の空……

持つものの何ひとつない……

リセットをするたび夜の……

帰ろうか 手折ればゆめも向日葵も……

非在の翅

きみのいる公園

告別

ゆめうつ

question

施錠

誘惑

夕立

約束

名前

夢はまたゆめの終わりを……

日向のなかに

あとがき

ひとりでいることが多かった。
ひとりでいると、身体がすこし軽くなった。

潮風が吹いてゆく。

すべての道を吹いてゆく。

ぼくには分からない。

とうすればいいのか、どこへ行けばいいのか。

夏になった。

いきものが死んだり、生まれたりした。

考えないほうがいいんだ、きっと。

感じないほうがいいんだ、きっと。

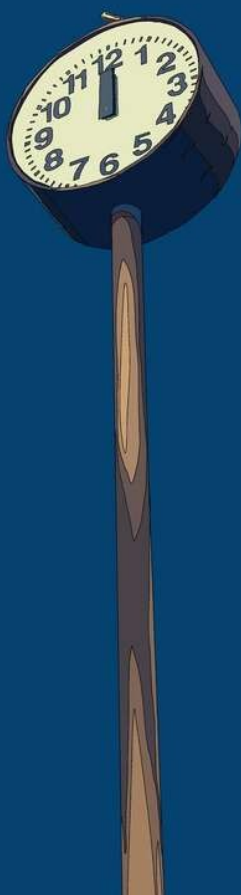
ぬるくなったジュースを
道端へ捨てるように

捨ててしまえばよかった。捨ててしまえば
自由になれるはずだった。

だけど、ぼくは。だから、ぼくは。

——その日、ひとりの少女に出会った。

第一部



はじまりの場所

海。触れない夢のかたち
空。届かない明日のさよなら
道。辿れないきみの思い出

ぼくは追っていた

光の残骸を

それは見る角度によって
ぼくの絶望や

すり切れた未来へと近づいていった

街。帰れない過去のしずけさ
羽。掴めない声のしたたり

夏。戻れないことの 残酷な純粋の中で





天使の瞳

思い出には
奈落のように底がない
という
恐ろしさのために
人は
この世界から消えていくのかもしれない
ぼくは
きみのうす青い瞳に射すくめられたとき
ふと
そう思った

天使、という一語がぼくの頭に浮かんだ。そのことは瞬く間にもつれ、魚になったり、落ちてゆく鳥になったりした。潮風。間断なくこの街の、うつろへ聚けてゆく潮風。死んでいるのだろうか、ぼくは。耐えているのだろうか、ぼくは。振向けば視野の、末端にたえずむきみへ、ぼくはどんな挨拶をすればいいのか。こんなにも時の、透明な光を浴びて。





不安

ぼくは
きみを見ていると
ぼくが
ぼくであることに
不思議と
自信がもてなくなる
それは
きみがいつも誰かに
似ているからだろうか
きみが
いつも誰にも
似ていないからだろうか

位置

うちよせる波の
とおのいた風の
かなしみの羽の
とけてゆく夢の
あおぞらの胸の
ゆるやかな道の
かわかない影の
にげだした水の
からっぽの街の

中心に立って
きみは
すべてを見ることが
見ないことの
危うい均衡に立って
きみは
ぼくという器に
きみという沈黙を
注ぎつづける



遅延

言葉はいつもおそいから
意味がきみへと届くまで
ぼくの視線はさびしさの
中でいくともたちまよう

言葉はいつもおそいから
意味がきみへと届くまで
ぼくの耳ではうみなりの
響きがドアをノックする

言葉はいつもおそいから
意味がきみへと届くまで
ぼくの鼻へとしおかぜの
香りはそっとながれ込む

言葉はいつもおそいから
意味がきみへと届くまで
ぼくの鼻へとしおかぜの
香りはそっとながれ込む





諦めるたび身体は軽くなってゆく。
夢を、愛を明日をあかるさを諦める
たび軽くなってゆく。そしてある
日、ある瞬間ぼくは宙にういてい
る。だが、どこへ行こう、こんな
も軽い身体で。せめてかなしみの鐘
があればここにいられる。けれどぼ
くは今朝、かなしみの死亡通知を、
街中にばら撒いたばかりだった。

疲れはぼくに
 新鮮なものの愛さを与えてくれる
 胸の深いところで
 水平にしずむ空を感じることが出来る
 一片の雲もない
 ましてや
 一片の苦悩もない
 それが
 この街のほんとうの姿である
 と
 告げているかのよう
 風は
 無垢という真空へ
 果てもなく
 吹き抜ける





光の束に目を細め

前ふれもなく去った人の
夏のこした眼差しのように
風のなかでめくられてゆく
日焼けした本のページには
どんな面影も重ねてはいけ
目に乾いた窓がらすは
へだてるためにあるのではないから
揺れうごくものはつねに淋しく
ひろがりにうちしずむ沈黙は
どこにも届かない

そっと頬をなでてゆく
白いゆびさき
ふり向いたらもう
取りかえすことはできないと知っていて
きみは見えない場所
聞こえない場所にかくされていた
ぼくのひとりであることに
砂浜の砕かれた貝殻は
いつまでも砕かれたまま
それが慰めであるような
時間のまわりをぼくは
歩きつづける

幕間



初夏よ 死は香りなつたましいのかたちを持たぬことの証に



臂の湿りのひとくかなしくて
天から落ちる電波に触れる







忘れられた言葉は
空のかたすみ
なぞぼくたちが
歌うか知らず

夢もまたひとつの声になるだろうここから先を海へとゆけば



妄想のなんてやさしい朝だろう
こぼれた水もそのままにして



みずぎわに咲く花枯れて折りから
折りへ郷を運んでゆこう



人知れずながるあめのひとしずく
しずかにゆめに傾く街で

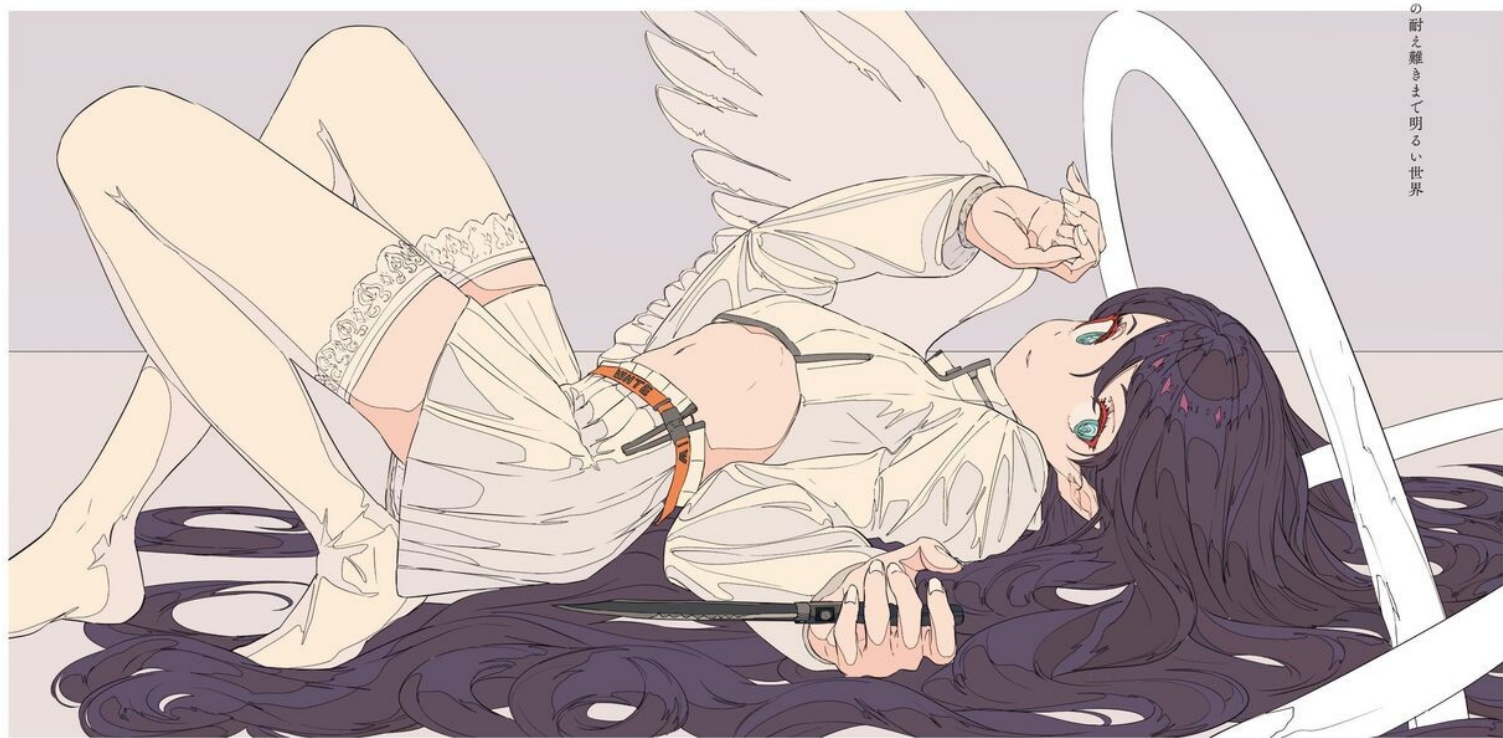


どの時間切れも愛しい星下がり向日葵のゆれやまね世界で



八月の肌をながれる水のこと 来ないで
ゆめは日だまりだから

ふいに目覚めふいに眠ってゆくことの耐え難きまで明るい世界

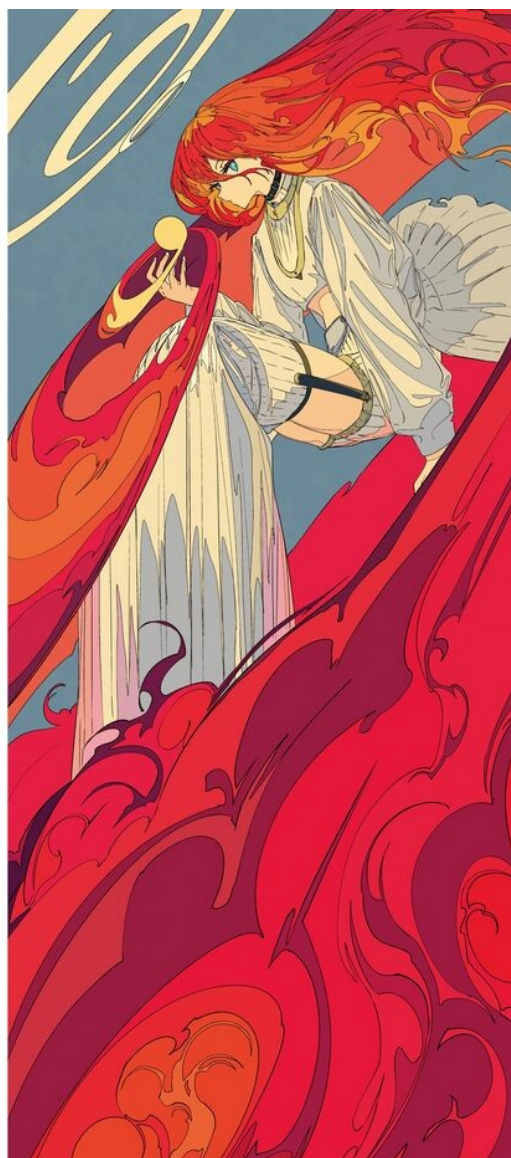


死の眠り　きのうは花を手折りつつ冷たい肌によれていたんだ



その日にはその日の地獄あることを告げつつ崩れゆく砂糖菓子

ほんとうはだあれも好きじゃないことのきらきらと陽に透かす手のひら



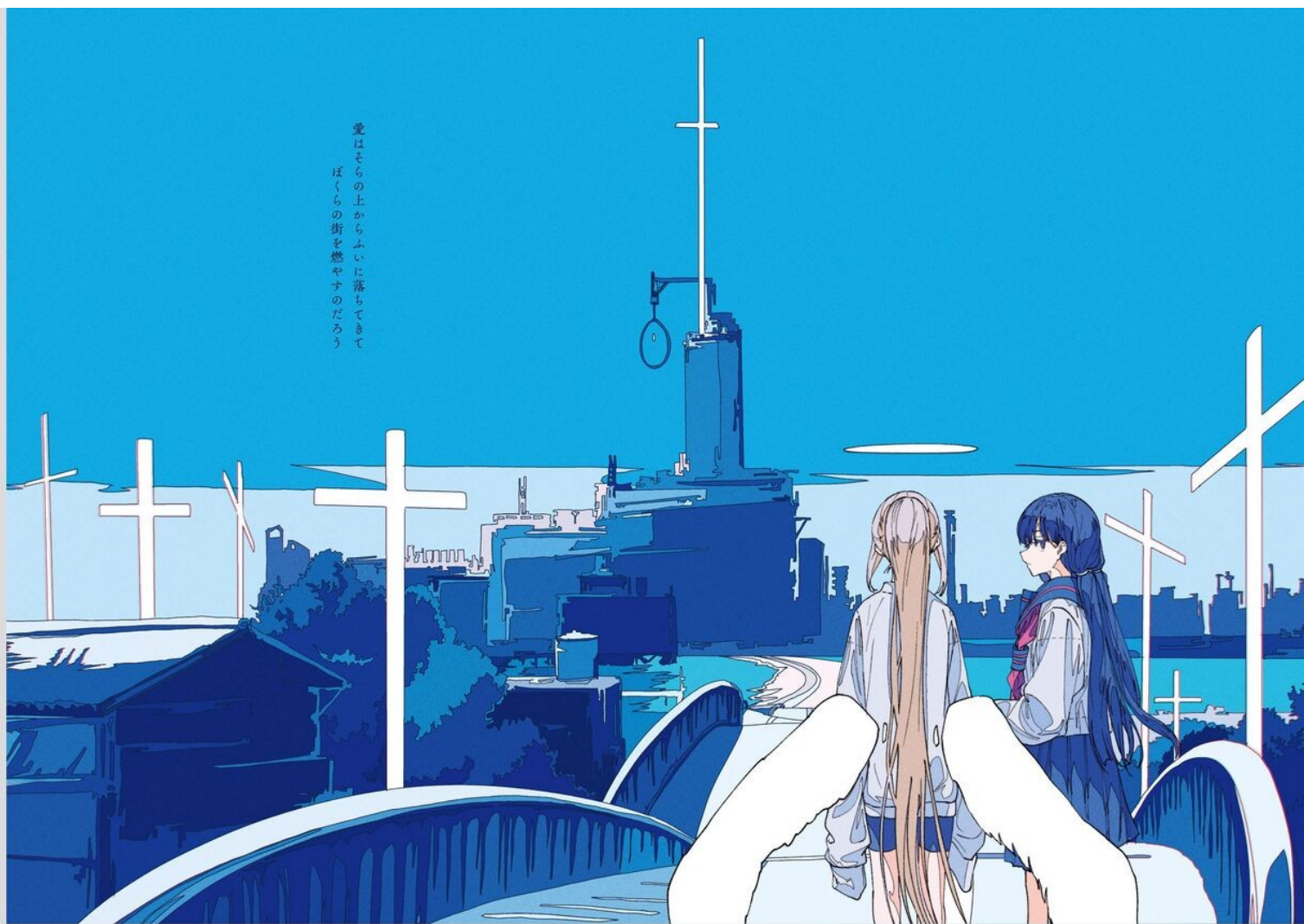
嘘まで溺れる きみの手のなかで光はまるで替人だから





ゆめうつつみへとつづくみちをゆく妄想こそが現実だから

愛はそらの上からふいに落ちてきて
ぼくらの街を燃やすのだろう



うす青いからすにゆびを這わすよう きみを視野へとおさめることは

点滴のどこまでもただ進みとおる
時おりばくは世界に



さらさらと種子のかけらよる街の
とうしてばくはこころはあるの

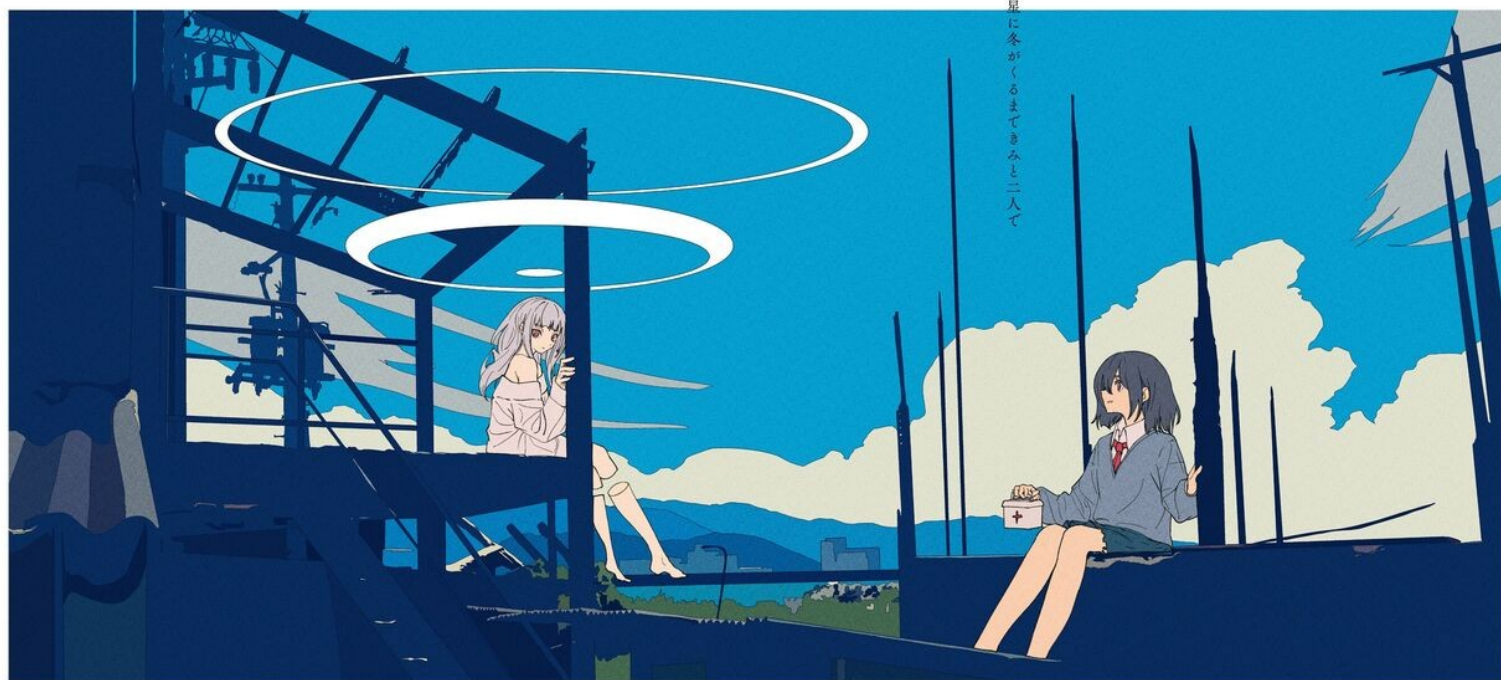
きみの眼がうつす滅びのやさしくて
やさしくてまたばくは俯く

全部嘘でしかないことの懐かしさ
浜辺には洗われた便箋

ぬれる船ゆられる肌のつめださのどこまで行けどころは遠く



日々の骨、ひろいあつめてこの星に冬がくるまできみと二人で





影に影重ねてぼくら空をゆく
きみが天使でなくなる夜も



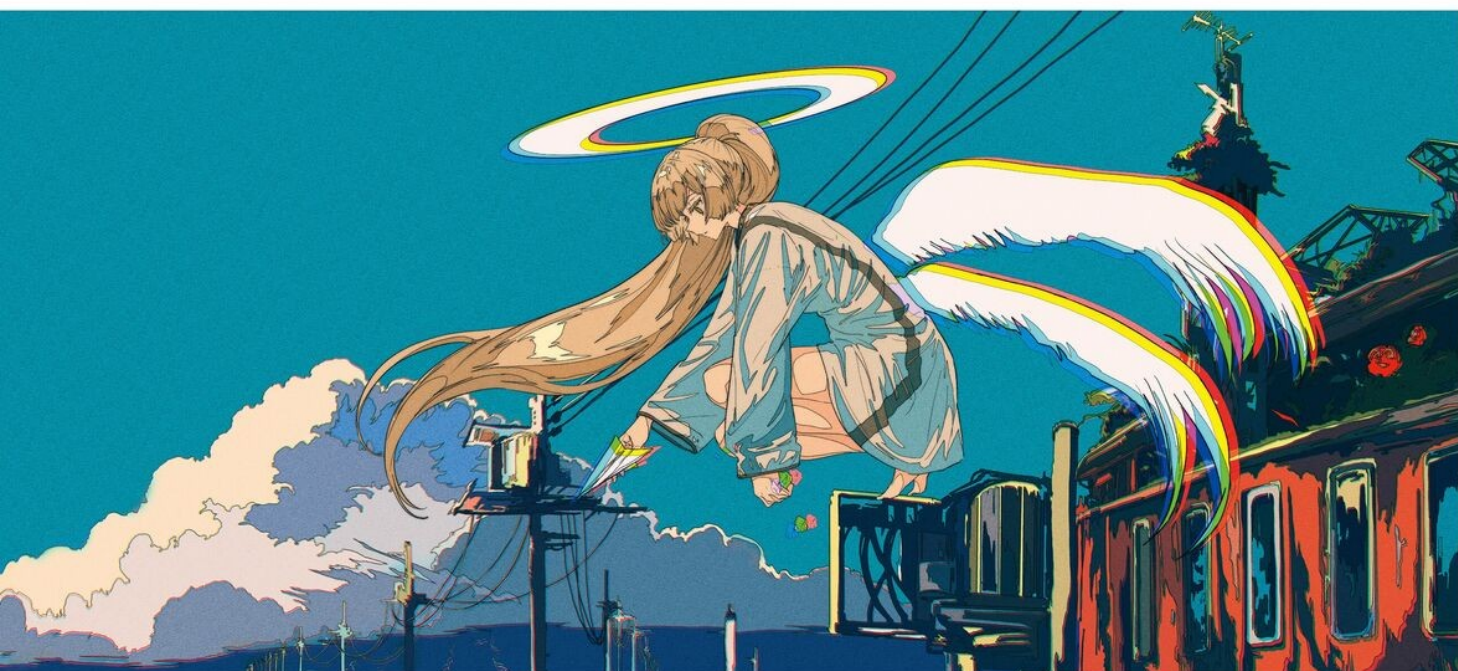
冬の空
きみはことばに傷ついてそのきずぐちに光は集う

そこだけが冷たい自室しあわせはぼくの頭をこわしてしまふ





死ぬのはいつもはくの内部の空ばかり
鳥たちは誰美歌を唄えど



持っもの
何ひとつない
ぼくだから
きみへと飛ばす
白い電波を

リセットをするたび夜のちかづいて折りだろうか言葉はすべて

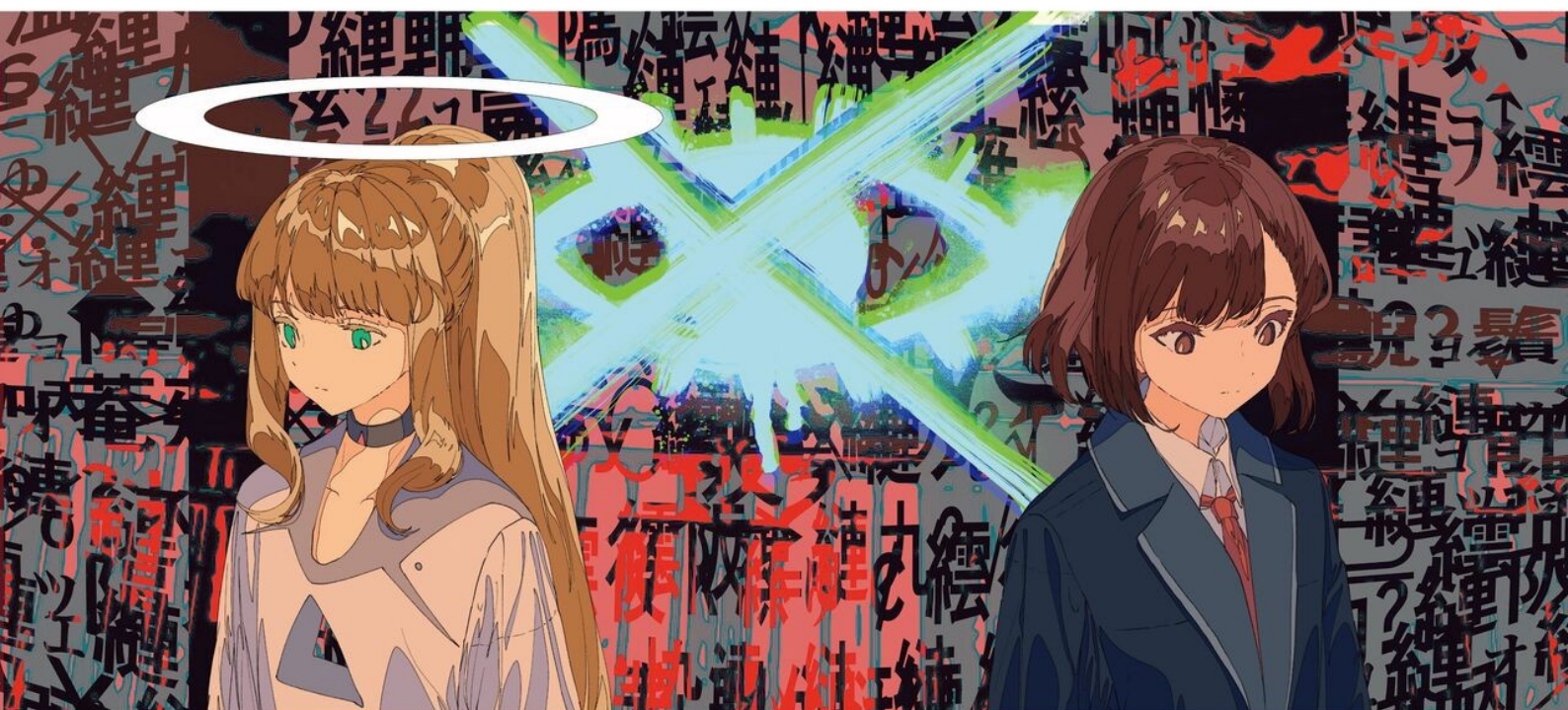




帰ろうか
手折ればゆめも向日葵もひとしく光りかがやく廃墟

夢の中あるいは街の中で
ぼくは頻りに話しかける
ぼくの天使はどこへ行きましたか？
ぼくの言葉は何をしていましたか？
いつだって先に予感があった
未来は庭の椅子に腰掛けていた
ところどころ欠けたぼくの天井から
洩れ入る光 それは音のない記憶だった

非在の翅をもつ人
非在を生きるやさしい人
ぼくはきみのようになることはできない
世界はそこで行き止まり
ぼくはもう話さなかった
白紙の手紙を いつまでも握りしめたまま



第二部





きみの永遠は差しおさえられ
わずかに歪んでいる
—— そう ほんのわずかに

流れてくるのは骨組
きみの あるいはぼくの失った
鉛色の骨組 それは
ぐにやぐにやと柔らかく
みずを含んでふくらんでいる

きみは 見たことがあるか
ぼくたちの澄명한街が ふいに
ただれた内臓を露わにする瞬間の
—— 顔のない白基を

警告はつねに砕かれ
この街の 果のない島に啄ばまれる
濡れたながい腕は
いったい どこから垂れてくるのか
空はのっぺりと暗れている
空気は乾燥だ 途方もない乾燥
しかし この濡れた傷だらけの腕は
いったい どこから垂れてくる

きみのいる公園の
錆びついた
噴水をぼくは知っている
きみが凝視している 幻影の
生臭いみずのことをぼくは知っている

でも ぼくはきみと出逢わない
きみは 公園のなかでずっとひとり
きみは そのほっそりした白い腕を
しずかに持ちあげて
太陽に透かしたりしている

きみは 気づいているか
白基が永遠につづくことを
そこには どんな言葉も
折りも入れないということを

もっと透明になれるはずだ
廃屋を見つめ
肺から絞られた夢想到
別れを告げることができれば
過ぎてゆく季節の
消えてゆく記号に
別れを告げることができれば
なれるはずだ
白い道に
息を詰めているところの
硬質な避難所になれるはずだ
橋をいくとも渡り
別れを告げることができれば
なれるはずだ もっと純粋な記憶に
記憶の彼方にある岸辺を
目指して進む 一隻の
帆船に





ゆめうつつ

蝶々さん
とこいくの
ひらひらひゅうと 光の粉

蝶々さん
あそびま
手拍子しゃしゃとや 影踏んで

蝶々さん
つかまえた
ぱたぱたこしより 花の上

蝶々さん
さようなら
天使がぼくを 連れてゆくから

ぼくは誰でもないことで、誰かだった。ぼくは誰かであることで、誰でもなかった。水の輪が、ひろがってゆく。ぼくは、何かに遅刻したのだ。それだけは確かだった。

だから

ぼくはここにいるの？

だから

きみはここにいるの？

この街の路上

この 焦げ付いた道の上を

だからぼくらは えんえんと

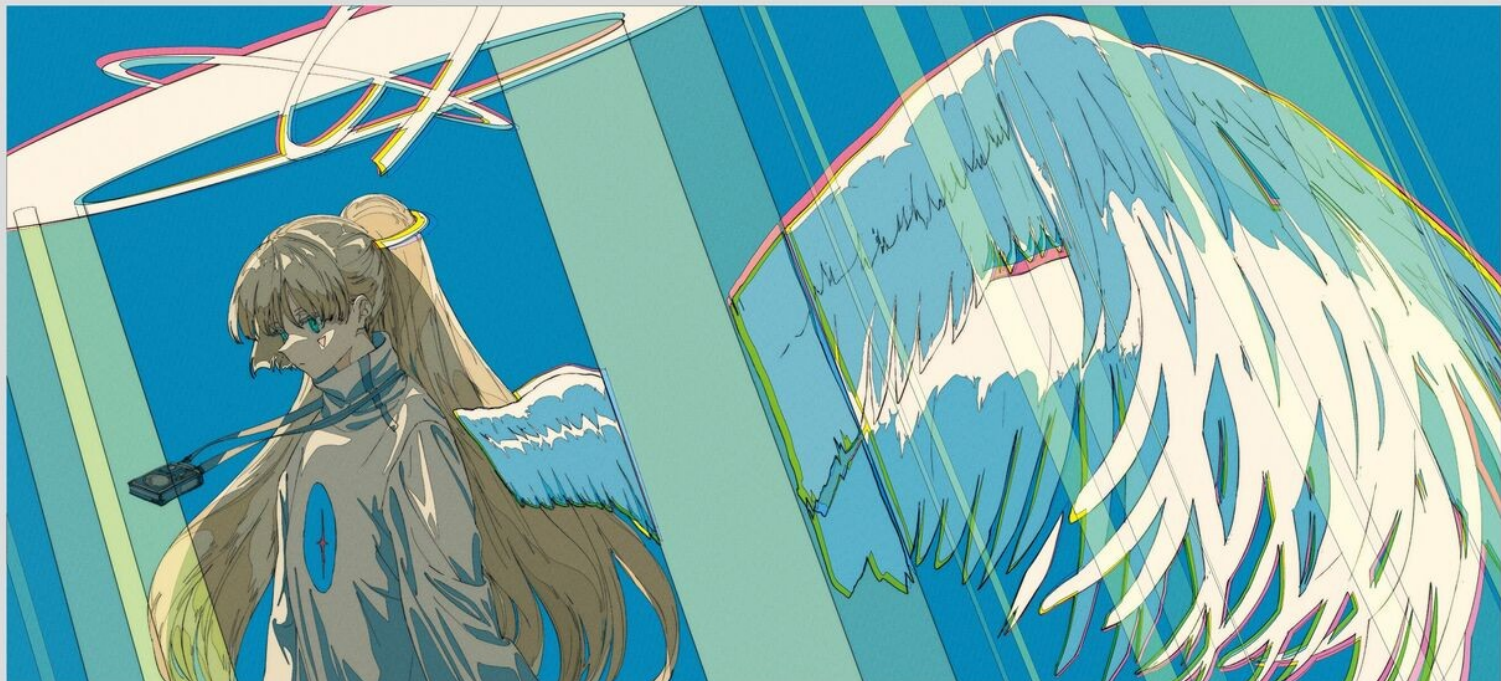
口もきかずにさまよっているのか？

世界は、ある遅れとしてしか知覚することができない。その、遅れのなかにしかぼくらは住むことができない。だから、

だから

きみはその美しい羽を
いつも重たげに背負っているのかい？



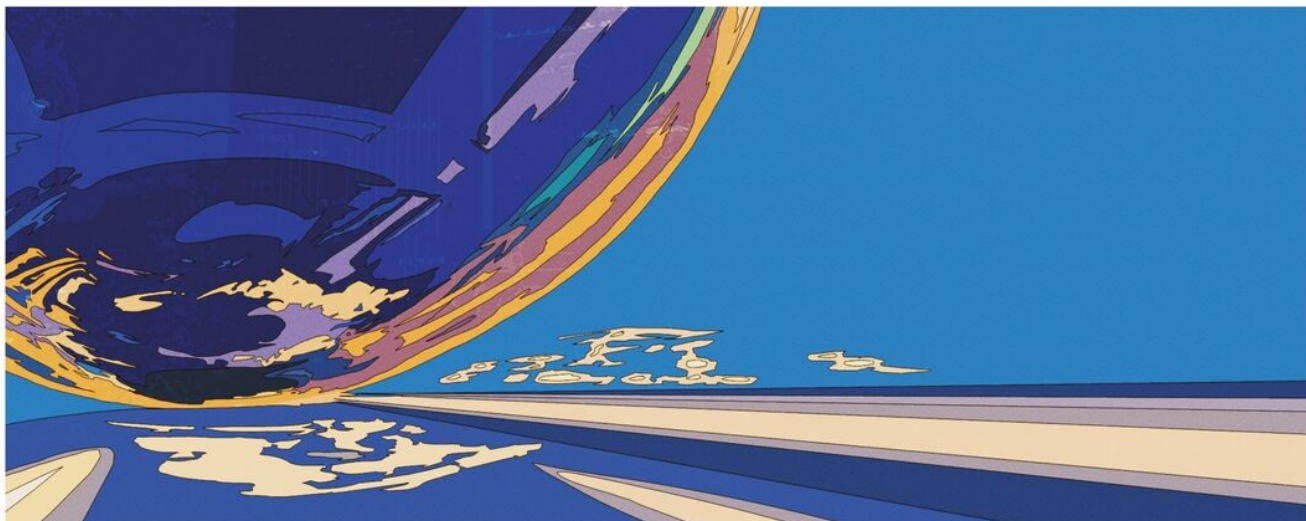


施錠

閉じられたドアの前にたたずんで
剥がされたくちびるには
ぬるいかぜとくちべにの色があつて。
鳥のこえが聞こえないのと
聞こえないのと絶えずいらだつて
はそくなつた指さきの
神経には枝のような屈辱があつて。
閉めきられたカーテンには
どこにも隙間なんてなかったから
深まつた影と
未熟にたわひれて
幾重にも絡みあつた水滴に
舌さきの緊張はかくされてゆく。

こつこつと
聞こえはじめた音は
ここが部屋のいちばん奥であると
告げているようにおもえて。
かすかなしんと。
爪さきにかげられてゆく力が
少しずつよくなつて
もうどこにもいないってことに
気づいていたはずなのに
日が傾いたあとも
閉じられたドアの前にたたずんで。

気怠さはアメ玉。舌に乗せて、転がしてみればこの甘さ。ぼくは、
 グールのふちに腰掛けて、足をみずの、ぬるい煌めきに浸しながら、
 いつまでも、いつまでも空っぽでありたいと、そう願ってたんだ。夕
 ぐれ、天使のゆめは赤く燃え、空一面にひろがって。気怠さはアメ
 玉。思い出と共に、砕いてみればこの甘さ。





夕立

ポケットから死んだ蝶がとびたつ

またぼくは夢をなくしてしまった

透明なものを探し求めたばかりに

またぼくは夢をなくしてしまった

夕立がぬらしてゆく街のはずれで

またぼくは僕になろうとしている



約束

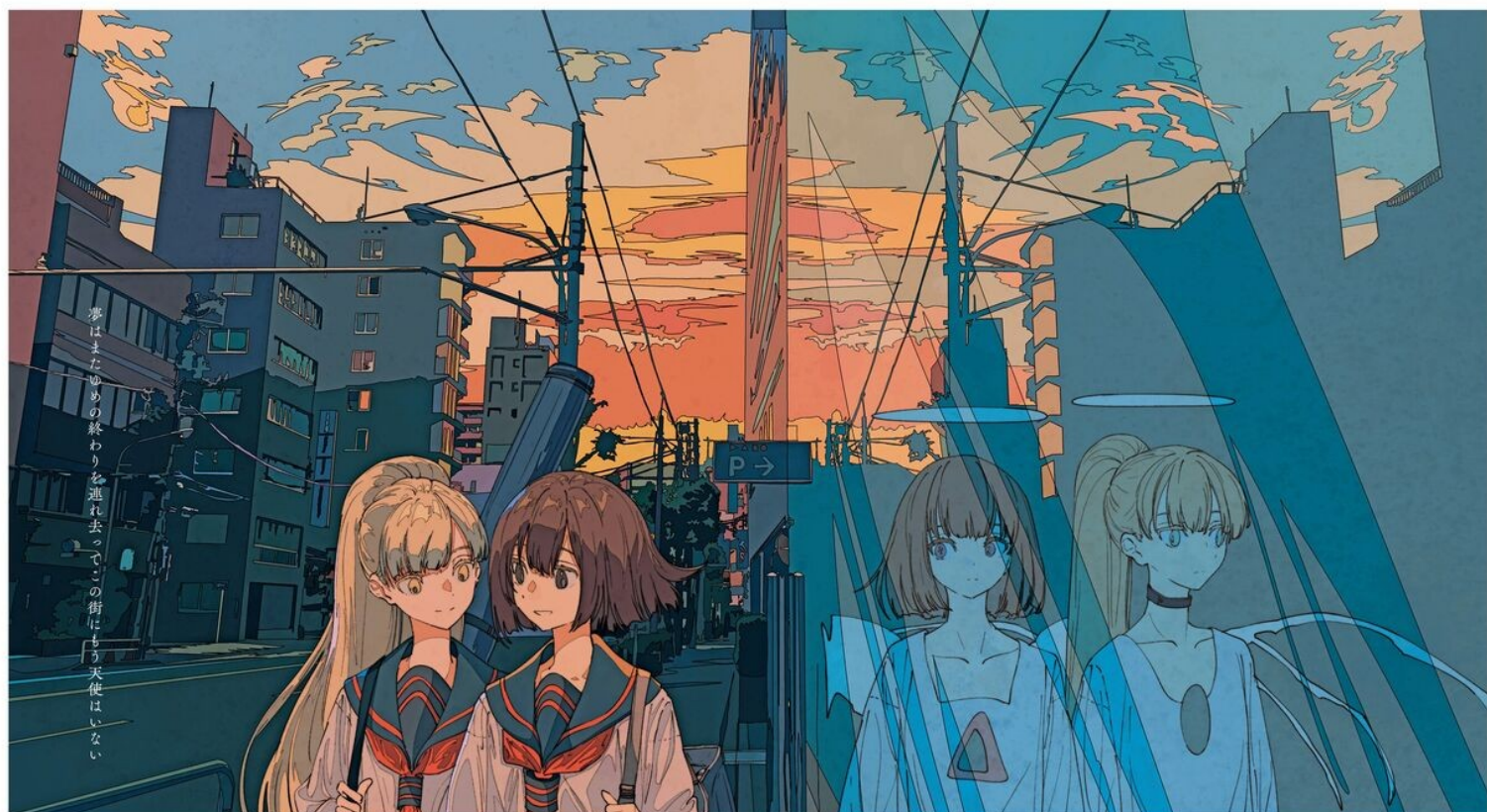
振り向けば消えてしまう
そこにあつたものも
あるはずだったものも
幼い記憶とともに
振り向けば消えてしまう
ひとりきりのぼくを
この街に残して

(遠く かなしみさえも置き去りに)
振り向けば消えてしまう
それは約束
いつか結んだ契約
振り向けば消えてしまう
最初から知っていた
だからこそぼくは この街で
きみを見つけたんだ

名前

もう 時間だ
ぼくは名前を呼ぼう
そうして世界から
全ての影を消し去ろう
影がなくなれば
ぼくの言葉も消えるのだ
失われたものを
もういちど失ったとき
ぼくは誰かに
名前を呼ばれる





あらかじめ生という座標があって
その後、やってきた。けだるい季節を
きみは手のひらで撫でていた

明るい陽射しには

もうどんな予感もなかった

ぼくたちの街の 時計塔はとおく
光のなかに埋まっている

歩きつづけること、それだけが
ぼくたちにゆるされたゆいつの行為
ざわめく並木道、並木道の向こう側に
まっしろなベンチは置かれていて

きみは眩しそうに眼をつむる
足はすこしも止めないで

ぼくたちにはリズムがある
それを頼りに歩いてゆけば
きっと 躓くことはないだろう

あらかじめ生という座標があって
ぼくたちには
ひとつだけからだがあった

もうすぐ太陽は 正午の位置につく
そのときは きみと
このひとつのからだを
日向のなかに投げだしていたい



辛い時は海の見える場所に行くことにしています。

私は自分が、年齢相当に大人になれていないと思っております。ひたすら何かから逃げている。

しかしその過程も美しいものだと最近思うようになり、そうして蓄積した退廃を、青臭さを、実感を、形にすることは出来ないかと思ひ今回の企画の初案を練り始めた次第です。

岩倉さんはまさしく自分にとってはとらえどころのないホログラムのような感じでした。

しかし誤解でした。紡ぐ言葉は脳細胞にズンと響く質量があり、退廃的な残り香が強く尾を引く。

どこにも居ないがどこにも居る気持ち、「自分」から生まれる衝動を描くことにひたひきであつたのです。

天使に逢いたいと思った。

いつからかぼくの内に棲みついた、名も知らぬ無愛想な天使。性別すらもあやふやなそんな存在に、気づけばぼくは惹かれていた。

天使。

それは言葉をもたず、こころも知らぬ存在。ふいに視野をかすめては、遠くかすかに消えてゆく、幻と呼ぶには明瞭な、それについて不確かな存在。本来ならばただそれだけの、詩人にありがちな一時の妄想で終わるはずだった。

しかし今回、なんの奇縁か無茶さんと共に一冊の本をつくる運びとなり、そこで再び、ぼくは「天使」に巡り逢う。無茶さんもまた、内に「天使」を

絵と言葉は密接な関係にあり、タイトルひとつで絵というのには意味合いがまるで変わってきます。それは内包する意味を縛るものや、新しい文脈を付与する力がある。

自分の絵と彼の言葉が同じページにあったらどうか、同じ本にあったらどうなるのか、こうなりやあ試みずには居られないと腹を括り、声をかけさせていただきました。云い出しっぱは私です。

装丁の有馬トモキさんは、言わずもがなデザイン領域を超えて活躍してらっしゃるスゴい方ですが、最初に私を小説の装画のお仕事に引き抜いてくださった以来そりゃあもうお世話になっていて、おそろく自分の青臭さや行動や絵に対する意図や、所謂面倒臭い部分を知っている方なので、今回の企画には岩倉さんと同様やはり欠けてはならない存在でした。

棲まわっていたのだ！

この本は、詩に絵をつける、或いは絵に詩をつけると言った、詩画集一般の発想からは隔たった場所から生まれた。ぼくらは同時に作品をつくりはじめ、時には互いの作品を見せ合いながらも、それぞれ独自に世界を深めてゆく方法をとった。

この本は言わば、ぼくと無茶さんの共作であると共に、競作でもあるのだ。それゆえ作中のイラストと詩歌とは、必ずしもぴったりと性格が一致している訳ではない。だがそのすれ違い、軋轢の奏でる音色にこそ「詩」が、「天使」が宿るのだとぼくは思ひ、それを貰った。

作品集が岩倉さんとの共著であることを焼肉屋で知らされたとき、きっとこれは彼らしい、彼ら特有の、素直な血が通った本になるだろうな、という予感がありました。彼らは天使の本についてよく語らい、そしてよく食べました。

そうしたこともあり、無茶氏と岩倉氏の対峙がそのまま現れるような、飾らざるべく作爲のない、素直な造本を目指そうと思ひました。用紙も物珍しさは狙わず、多く流通しているものが、また別の文

と、云えば格好はつくのですが、この本の制作にあたっては迷惑をかけるだけかけてしまったので誠に頭があらぬ思いであります。二度と口を聞いてもらえぬのではないかと心臓に氷が刺すような気持ちであります。

とはいえ描き溜めのようであった自分の作品群を、掛い無く装丁に反映して下さり流石と云う他ありません。

以上です。

本書を作るにあたり携わってくださった方に謝罪と大きな感謝を。

手に取ってくださった全ての方に感謝を。

またとこまで。

無茶

天上と地上。生と死。人と神。男と女。そのどちらでもあり、どちらでもない存在。そんな境界上をさまよう天使に、この本がどこまで内潜してきたかは分からない。けれどぼくらは持てるだけの力と幻想をもって、天使という不可思議な、また天使を見ることの冷えびえとした感動を、一冊の中に留めようと思ひ、その僅かな残響だけでも、感じ取ってもらえたなら幸いである。

岩倉文也

眠て見えてくるようなものかと思ひて選んでいきます。汗をかきタイプの仕事でも、ホールインワンを狙う仕事でもありませんでした。ただ本棚を整頓するような意識はあったと思います。その結果として、岩倉氏の、あわいを現代的なまなざしで捉えようとする動きの一助になっていければ幸いです。細かなレイアウトをご一緒してくださった田中氏にも、深くお礼を申し上げます。

有馬トモキ

ヨグチー

焦茶

旅するイラストレーター。1995年生。2016年よりイラストの仕事を受注しながら、自主制作作品も積極的に発信。主な仕事に『Fate/Grand Order 電撃コミックアンソロジー11』、『火曜新聞クラブ—最社登見台の探偵—』、『重カメルケミッタ』『少女庭園』(文庫版)の装画や、バーチャルクイパー樋口楓のイベントビジュアルなどがある。

Twitter: @BARD713

イソクラフミヤ

岩倉文也

詩人。1998年福島生。2016年頃より歌作、詩作をはじめ、新聞歌壇や詩誌への投稿を始める。2017年、毎日歌壇賞の最優秀作品に、2018年「ユリイカの新入」受賞、同年『詩と思想』読者投稿欄最優秀作品にも選ばれる。2019年、第24回中原中也賞最終候補、著書に『傾いた夜窓の下で』(晋土社)がある。

Twitter: @fumiya_fwakura



天使を見た

無事、御倉文也

あの夏ぼくは

あの夏ぼくは天使を見た

無事、御倉文也

"I saw the angel in the Summer"

あの夏^{なつ}ぼくは天使^{てんし}を見た^み

著者 焦茶・岩倉文也



BOOK☆WALKER

2019年10月31日 発行
Ver.001

©cogecha / Fumiya Iwakura 2019

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
「あの夏ぼくは天使を見た」
2019年10月31日 初版発行

発行者 川金正法
発行 株式会社KADOKAWA
<https://www.kadokawa.co.jp/>

●お問い合わせ
<https://www.kadokawa.co.jp/> (「お問い合わせ」へお進みください)
※内容によっては、お答えできない場合があります。
※サポートは日本国内のみとさせていただきます。
※Japanese text only

本電子書籍の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、
あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。
また、本電子書籍の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本電子書籍購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず
本電子書籍を第三者に譲渡することはできません。
本電子書籍の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。
本電子書籍を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に
予告なく変更される場合があります。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。